第 11 号
2025 年夏

屋久島いきもの調査隊通信

瀬切の森からの手紙





2025 年ヤクザル調査を行いました！ 02
調査員からのクーコール（11）Sykora(七五三木) 環さん 04
調査メシ（11） コロナの前と後 06
やくざる七つ道具（11） チルホール 08
屋久島の森の住人たち（11） ホウロクイチゴ 10
解き明かす！ 屋久島の生き物の暮らし（11） 12
やくざるなよんこま（11） 15
24 時間戦えますか（6） シカ調査 16
犬山より 18

Research Group since 1989

2025 年ヤクザル調査を行いました！

今年の調査、終わってみれば、すべての定点を 4 日以上調査し、久しぶりに調査対象の 5 群すべてをほぼカウントできました。台風は 2 回弱いのが来ましたが、雨も風も大したことはなく、林道もつぶれず、たいへん平穏無事に終了しました ... と言いたいところですが、実際には、これまでにないトラブルに見舞われたのでした。

最初のトラブルは、集合日の翌々日、日帰り調査の帰りに起きました。ジムニーが脱輪してしまったのです。林道の道下側に、右前輪がはまってしまい、押しても引いても動きません。この日は、8 月 11 日月曜日。整備士の人たちもみんなお盆休みで、レッカーを呼べるのは早くて 8 月 18 日とのこと。当分車 2 台でしのぐしかない、と一度は覚悟したのでしたが、結局、翌日の 8 月 12 日に、チルホールという林業機械を使い、自力でジムニーの救出に成功しました。この顛末は「やくざる七つ道具」で。


救助隊がやってきてくれました。

8 月 13 日にはテン場を設置し、順調に調査を開始しました。まずは調査域の一番奥の東側からやることにして、わたしは HR 群の調査に取り組みました。この群れは 2000 年以来、わたしが継続して個体識別して調査をしています。林道のないところにいて、1 頭 1 頭識別している個体がいるかどうかを確認することでカウントしています。原生林の中を縦横無尽に歩き回る彼らについていくのはたいへんですが、だれも知らない屋久杉の森の絶景をサルたちと一緒に見るのはこの上なく贅沢な時間です。

HR 群の追跡調査 3 日目だった 8 月 16 日、午前 10 時 23 分。サルが移動するのに急いでついていこうとした私は、倒木の上を歩こうとして、その倒木が腐っていたために崩れ、1m ほどの高さから落下して腰を強打しました。サルたちはびっくりして、「クワン！」という警戒声を上げていました。現場はもっとも近い定点から直線距離で 260 メートあまり。GPS で調べた緯度経度を無線機で伝えて、4 人の調査員に救助に来てもらいました。幸い動くことはできたので、荷物は彼らに持ってもらい、自力で歩いてテン場まで戻りました。このあと、激痛に耐えてなんとか車で宮之浦の病院まで連れて行ってもらい、診断を受けました。腰椎骨の突起が折れていました。

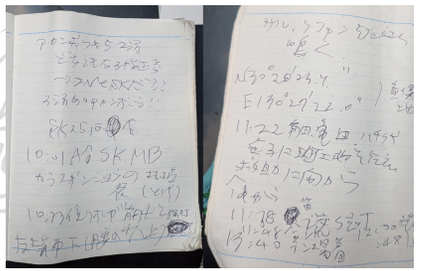
結局この日以来、わたしは調査地に戻ることはありませんでした。当初は、どのような姿勢をとったら痛くなるのかがわからず、いったん激痛が走ると、3 分ほどは、そのままの姿勢でぴくりとも動けないということが何度かありました。ちょっとよくなったかなと思った頃、ためしに西部林道での実習をわたしが担当しましたが、サルを 2 時間ほど林道から見ていただけなのに、その翌日には腰痛がひどくなりました。わたしがテン場に行けないので、指揮の都合上、テン場は 8 月 18 日に撤収して、全員毎日下界から通ってもらうことにしました。毎日朝 4 時に起き、5 時前に出発するみなさんを見送ったあと、ひとり好和荘で夕食を作って待つ日々を送りました。

こうして、否が応でも若い人たちだけで調査を行うことになりました。彼らの活躍は、毎日のミーティングの話を聞きながら想像するしかありませんでしたが、確実にデータは集まっていきました。そのあとも車がシカに衝突してラジエータが壊れたり、調査中に大雨や落雷があって調査を切り上げたり、車がパンクし、新品のタイヤが届くのを待っている間にまたパンクして、その車を林道に置き去りにしないといけなくなったり、いつもの年にもあるようなトラブルは起こりましたが、彼らは難なく切り抜けてくれたようです。

当初は、調査の最終盤に、もう一度わたしが調査地に復活して、原生林での果実量調査をするつもりでした。これは、50 メートル四方の調査区に生えている、サルが食べる果実の数を数えるという調査です。
1999 年に始めて以来、わたしがこの調査をしなかったことはありませんが、志願してくれた調査員二人に任せることにしました。プロットのどこにどの番号の木があるか、全部覚えているわたしがやれば 6、7 時間で終わる調査ですが、木を見つけるのに苦労した二人は、1 日では終えられず、調査最終日の 9 月 13 日に、3 人で調査に行って、ぶじデータを取り終えました。折あしく雨も降り、あまりにつらくて、「こんな調査に志願しなけりゃよかった」と思ったと、あとで話してくれました。

振り返れば、ヤクザル調査隊隊長の好廣眞一さんが心臓手術のために調査に参加できなかった 1995 年、学部生だった私が急遽事務局を引き継いで、今に至っています。あのときの好廣さんの年齢が、今の私と同じ 50 歳だったことに、何かの縁を感じます。あのときも今年も、古手の退場は若手の成長を促したようです。

（半谷吾郎、1993 - 2025 年参加）


なんでも記録に残します。ちょうど事故の直前、この群れに 3 頭目の赤ん坊がいるという決定的な観察をしたのでした。

サルのメモ帖

事故現場周辺にいちばん詳しいのは、結局けがをした私なので、わたしが先頭に立って林道まで戻りました。高さ 20cm ほどの倒木も跨げずとぼとぼ歩くしかない状態でしたが、一緒についてていた学生が「半谷さんが速くてついていくのが大変だった」と言っていました。お世辞かな !?

調査員からの クーコール 11

クーコールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。
各界で活躍する調査隊 OBOG に、クーコールを鳴いてもらいました。

Sykora（七五三木）環　　2014、2016 年参加

こんにちは。2014 年、2016 年参加の、、、と書き始めたところで、あの色鮮やかな思い出の数々がもう 10 年も前の出来事だったのかと驚いています。


愛犬 Maple と

霊長類の研究に憧れて大学に入り、サークルの集まりで「サルに興味あるんです！」と言った瞬間に、隣の机から飛んできたヤクザル調査隊のチラシ。集合日直前に縄文杉を見に行って右足を負傷 (縄文杉までは辿り着けず) し、入山日に重い荷物を背負ってテン場まで向かう仲間たちを横目に、半谷さんのジムニーの助手席で申し訳なさに潰されそうになりながら山道を進んだこと。苔むした巨木の間を抜けて定点まで向かい、木々のざわめきや鳥の声、風の音を聴きながらヤクザルの気配に耳を傾けたこと。定点には自分ひとりのはずなのに、不思議と孤独感はなかったこと。雨のあとコケに付いた水滴がまるで宝石のように輝いていたこと。テン場に戻って飲むココアの美味しかったこと。ヒルに気づかず、背中が血まみれになったこと。夜中に雨で寝袋が水浸しになり、凍えそうになりながら夜明けを待ったこと。次の日、食当のひとたちがみんなの寝袋をテン場に広げて干しておいてくれて、ふかふかに乾いた寝袋と服で寝られる喜びを噛み締めたこと。三岳の会でランタンの柔らかな光の下、おしゃべりしたこと。思い返すとなんと豊かで幸せな時間だったことでしょう。


家の近くを飛んでいたハクトウワシ

大学院ではウガンダで野生動物とそこに生きる人びとの暮らしを調査し、現在はアメリカのミネソタ州で、夫と息子、犬と暮らしています。

ここは車で 5 分も走れば地理の教科書に載っているような巨大なトウモロコシ畑が広がる小さな街です。冬には氷点下 25 度になるときもあり、運がよければオーロラも見られます。残念ながらサルはいませんが、ハクトウワシが飛び回り、家の前の池にはカミツキガメが泳ぎ、シチメンチョウやカナダガンが道路を塞いでいることもあります。10 年前には予想もしていなかった人生ですが、相変わらずお散歩に行くときはポケット図鑑を片手に、道中出会う生き物を観察しています。ちなみに Sykora はスラヴ系によくある姓で、シジュウカラ科の鳥を指します。生き物好きとしてとても気に入っています。

最近は日本を含め世界各地の伝統的な文様や衣装、手仕事に興味があり、育児の合間に洋裁や刺繍などに没頭しています。


季節外れのオーロラ

院を卒業してからアカデミックな世界からは遠ざかり、日本と違う環境で過ごす中で、自分が何者か不安になることもあります。結構どこでも生きていける自信はあるのですが。しかしふとした瞬間に、あの時のきらきらと輝く小さな思い出の数々がまるで数日前の出来事かのように蘇って、私を繋ぎ止め、夢ではなく私は確かにあの場にいたのだと感じます (ご飯炊くのに失敗して、芯米ができちゃったときとかね！)。

そのうち調査隊に参加する学生さんたちは、私より息子と歳が近いようになるでしょう。調査隊がこれからも末永く続きますよう、応援しています。屋久島で蓄えた経験の数々が、隊員のみなさんの未来を支える標になりますように。

サルのメモ帖

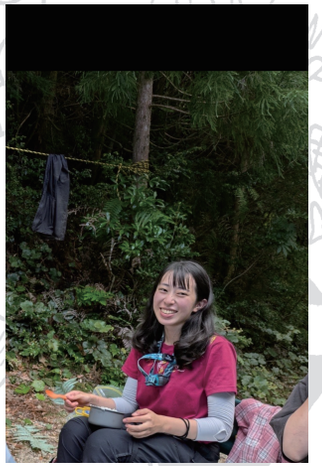
コロナ前は、20 数人が一斉に入山するため、荷物は車で運びましたが、そのあいだに人は歩いて行けるでしょ、ということで、林道終点のテン場まで歩いて行ってもらっていたのです。「重い荷物」は背負っていないはずですが、記憶が少々、美化 !? されてしまったのかもしれません。

調査メシ 11

食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘をレシピとともに語ります。

手塚詩織　　2018 - 2025 年参加

コロナの前と後



皆さん、コロナ禍の生活を覚えていますか？マスク品薄、緊急事態宣言、オリンピック延期 … 振り返ると生活が一変しましたね。ヤクザル調査隊でも、コロナを機に大きな変化がありました。今回は調査中の食事に注目して、今や数少なくなったコロナ前からのヤクザル参加者の視点で、こう変わったのか！と感じる点を紹介します。

今とは違い、コロナ前は「食当」つまり食事当番がいました。当時は一斉に集合解散していたおり、現在の人数の倍近く約 25 名分もの食事を用意する必要がありました。食糧の管理と料理の指示は「食当隊長」が担当、実際の食事の準備は、日替わりで食当を決めてその人たちが調査を休んで行います。食事の準備に失敗すると大変。いつまでもネタにされます。私は料理が得意ではないので、もちろん失敗しました。初参加の年、みんなが実習に行く間に全員分の昼食を用意するというミッションで、びしゃびしゃの目玉焼きを焼きました .. 角田さん、美衣さんも一緒に失敗したはずなのに、なぜか私が一番の容疑者になったのは納得いかないですよねえ。ですが！大人なのでもう何も言いません。



びしゃびしゃで黄身が潰れた、たくさんの目玉焼き

コロナ後にヤクザル調査に参加してみると、なんと好和荘では半谷さんが料理しているではありませんか。さらに手際が良すぎてあんまり手伝わせてもらえない。半谷さんが料理している間はやることがなくて、みんなのんびりしているという状況に初めは戸惑いました。半谷さん的には自由に料理ができて、逆に羽を伸ばせているみたいですね。半谷さんのおいしい料理が食べられるのは嬉しいので、代わりにみんなで食器洗いをがんばっています。



今回の調査で半谷さんが作ったピザとスパゲッティ

まだあります。コロナ前は集合日の夜～下山日の昼まで献立が決まっていました。食当ノートに献立、約 25 名分の分量、手順が書かれていて、料理が不得意な人でもできるようになっていました。調査中は食事が一番の楽しみなので、どの料理にも思い入れがあります。実習日昼食のトビウオ一夜干しや入山日昼食のちらし寿司を食べる時、これから始まる調査への期待感が高まります。調査中盤は大豆のチリコンカン、シーチキンシチュー。温かいご飯が頑張った身体にしみていきます。調査終盤は親子丼のわかれ、最終日はビーフシチュー。徐々に解散が近づき名残惜しさはあるけれども、充実した時間を過ごしていたからこそ、前向きな気持ちで食事をとります。

今ではコロナ対策で調査員の人数を減らしたことをきっかけとして、食当を置く余裕がなくなり、テン場生活中朝はインスタント味噌汁、昼は缶詰、夜はレトルトを活用しています。レトルトといってもカレー、ハヤシライスソース、中華丼など色々選べるので飽きることはありません。OBOG の皆様から寄付していただいた食品をありがたくいただいています。テン場での食事の準備は米炊きとお湯を沸かす程度で済むので、責任から解放されてうれしい面もあります。今の調査形態で、山の上でも料理しようとすると献立や食糧の管理を考えるのが大変そう。コロナ後の参加者の皆さんにも、コロナ前の「ヤクザル調査の味」を体験していただきたいです。

サルのメモ帖

コロナ以前の献立は、2000 年ごろからずっと変わらず、集合日カレー、翌日肉じゃが、入山日豚汁、調査第 1 日ポトフ…という具合でした。意欲的な食当隊長がトムヤムクンを新規導入したら、刺激が強すぎ胃腸をやられる人が続出して断念、ということもありました。

やくざる七つ道具

山の中に泊ってサルを調査するのに、ヤクザル調査隊は様々な道具を駆使します。30 数年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

チルホール

調査地の終点近くから延びている 12 支線は、今は林業の作業のために使われることはなく森林管理署も補修をしてくれません。12 支線の長さは 3.3km。歩いて通ることはできるのですが、車がしばらく通らずにいると林道に生えているスギが成長し、しまいに道路を覆いつくします。放置すると単に通りにくいだけでなく「林道を群れが一斉に渡るところを数える」という、調査の重要な機会を失うことになります。そこで、生えてきた木を草刈り機やチェーンソーで切る地道な作業、通称「藪破壊」を毎年こつこつ、少しずつ進めています。


チルホールで倒木を動かします

人力で押してもびくともしないような落石がある場合に使うのが、手動式の小型ウインチ、チルホールです。ワイヤーとセットになっていて、レバーを引くと一方向だけに動き、人力で重量物を牽引できます。途中で滑車を挟むことで、縦・横・斜め、どの方向にでも自由に引っ張ることができます。ヤクザル調査隊 OB で、三重県・和歌山県で林業の仕事をされている戎谷秀雄さん (1991-1999 年参加) に、半谷と本田剛章さん (2013-2022 年参加) が習いに行って、使い方を習得し、2021 年 3 月に、それまで 3 年近く 12 支線をふさいでいた落石をどかして、開通させました。

さて、このチルホール「2025 年ヤクザル調査を行いました」で報告したとおり今年の調査で脱輪したジムニーを救出するのに使いました。この日、昨年から 12 支線をふさいでいる直径 70cm 近いモミかツガの倒木をチルホールで動かしたり、林道をふさいで折れた細いスギをチェーンソーで切る作業をしました。大きな倒木は撤去できましたが、細いスギはチェーンソーの調子が悪く、手ノコを持ってきていなかったため人力で切ることもできず、林道がふさがったままの消化不良状態で作業を終了したのでした。そのときふと「チルホールで引っ張れば脱輪しているジムニーを救出できるのではないか ...?」という考えが浮かびました。車検証で確かめるとジムニーの重量は約 800kg。チルホールの耐荷重 1.2t の範囲内です。


チルホールとみんなの力を結集して、ジムニーを脱輪から救出します。

ジムニーは右前輪が林道の端にはみ出ていましたがその際に直径 20cm くらいのスギの切り株を踏みつぶし、それが前輪のシャフトに引っかかっており、人力で押しても動かない状態になっていました。木に車体が乗っているため、切り株を切った際の車の動きが予想できず、切り株を切るのも危険でした。もし、後ろ上方からチルホールで引っ張れば、切り株が車体から外れ、車体がチルホールで固定された状態で安全に切り株を切れるのではないか、と思ったのです。

前輪付近の車体下にスリングを通し、それを運転席・助手席の窓を開けて輪にしたところちょうどぴったりつなぐことができました。それをワイヤーにつなぎ、ワイヤを後方上部の木に引っ掛けた滑車で中継し後ろからチルホールで引っ張りました。同時に 3 人で前から持ち上げたところ、車体が動きジムニーにつぶされていた切り株が持ち上がりました。切り株は車体の重みからは解放されたものの、まだ車の動きをじゃまする場所にあったため、下界まで往復 3 時間かけてのこぎりを取りに行き、1 時間ほどかけて切断。満を持し、さきほどは別の作業をしていた人も含めて 8 人で前と右側から押しわたしが車に乗り込んでハンドルを操作し、チルホールで後ろから引っ張ったところ、ついにジムニーの右前輪が林道に乗りぶじ脱出に成功したのです！スリングで締め付けられた左側のサイドミラーが折れてしまったのはご愛嬌でした。

翌日、3 台の車が揃ったのでテン場設営を行い、手ノコで 12 支線をふさいでいた細いスギも切って、12 支線を 1 年ぶりに開通させたのでした。

(半谷吾郎、1993 - 2025 年参加)

サルのメモ帖

この日、林学の実習でチルホールもチェーンソーも使った経験がある横山大河さん (2024-2025 年参加) が大活躍。林業の現場で、どういう事故が起こりやすいかまで説明してくれて、事故なく作業を終えることができました。

屋久島の森の住人たち 11

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象であるニホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

ホウロクイチゴ　*Rubus sieboldii*
広島県・島根県以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑低木。葉は常緑のキイチゴ類のなかで最大。



屋久島に来て、生き物のことを何も知らない初参加の調査員が、真っ先に名前を覚える植物の一つが、ホウロクイチゴです。調査員が、定点までの道の途中、森の中で木が倒れたりして明るく開けたところを通り抜けるとき、「ほかは全部やぶでふさがっていて、ここを通らないと向こうには行けないようなところ」に限って、このホウロクイチゴが生えています。

ホウロクイチゴは、葉っぱも茎も凶悪なとげだらけで、わたしの好きなハイノキのように、さらさらと葉をかき分けることはできません。たとえ軍手をしていてもそれを貫通してとげが刺さります。なたでぶった切ることができなければ、とげを触らないように慎重に指でつまんでどかすか、足で何とか踏んづけて進むか、最終的にはボクサーが顔をガードするように、顔を腕でブロックして突き進むしかありません。森の中で 2、3 時間も HR 群のサルたちを追いかけたあと、ズボンを脱ぐと、ズボンを貫通してできたホウロクイチゴによるひっかき傷が脚のあちこちに無数にできています。指に刺さったとげを抜くのが、テン場での日常作業です。

ホウロクイチゴは、典型的なパイオニア植物、つまり森の中にぽっかりできた光条件のよい場所でいち早く生え、すばやく生長する植物です。「やぶの中の、ここを通らないと向こうには行けないようなところ」に限って生えているのは、まさにホウロクイチゴがそういう植物だからです。森の中の土にはホウロクイチゴの種子がたくさん埋まっていて、上を覆っていた木が倒れると、一斉に発芽するのでしょう。



ところが、このホウロクイチゴには、どうしても憎みきれないところがあります。果実がとてもおいしいのです。木イチゴ類はほかにも何種類かありますが、だんとつにホウロクイチゴの果実が大きく、そしておいしいのです。ただ、ヤクザル調査の期間中である夏の盛りには、そう簡単に見つかるものではありません。ふだんの年は、わたしが目ざとくみつけて、1 日に 1 個食べられるかどうか、と言ったところです。思い返してみると、20 数年前、大川林道終点付近で調査を始めた最初のころは、もっとたくさんのイチゴがなっていて、たとえばその日誕生日の人にあげるケーキ（そのケーキがどんなものだったか、記憶が定かではありませんが、火を使わないでも材料を混ぜただけでできるチーズケーキだったかな ... ？）にのせるため、食事当番の人がイチゴ摘みに出かけたことがありました。最近はケーキにのせられるほど集められることはほとんどありません。伐採後 10 年も経っていなかった 1990 年代の終わりから 2000 年代の初めと比べ、全体的に森林が成熟して、ホウロクイチゴも少なくなったのでしょうか。

サルの糞からは、特徴的なぼつぼつのあるイチゴの種子がよく出てくるので、サルもホウロクイチゴの果実は好きに違いありません。ただ、一瞬で食べ終わってしまうこともあって、サルが実際に食べるのを見たことはあまりありません。それよりも、ホウロクイチゴの茎を折り、皮をするすると剥いて、セロリのように髄を食べるのをよく見ます。わたしも食べてみましたが、ほとんど無味でした。それよりも、よくあのとげだらけの茎の皮を剥けるものです。痛くないのでしょうか !?

（半谷吾郎、1993-2025 参加）

サルのメモ帖

サルのいない口永良部島では、ホウロクイチゴの実を食べる動物があまりいないのでしょう。わたしが初めて口永良部島を訪れた 1997 年、島内某所で、喜んでたくさんなっていた実を食べていたら、あとでそこが小学校の遠足でイチゴを食べに行く場所だったことがありました！

解き明かす！屋久島の生き物の暮らし 11

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

屋久島で人とサルが共存していくために何ができるか

大坂桃子　2017-2020 年参加

大坂桃子・山越言・平木雅・半谷吾郎（2025）屋久島におけるニホンザル農作物被害問題の所在―住民の被害認識に注目して―．霊長類研究 41(1): 3-16

屋久島ときくと大自然にばかり注目が集まりがちですが、そこには 24 の集落があり 12000 人ほどの人々が暮らしています。豊かで多様な自然の中での人々の営みは、「海に十日、里に十日、山に十日」とも表現されており、知れば知るほど魅力的です。また、集落ごとに伝統行事や言葉までもが異なり高い多様性をもつのも、興味深い点のひとつです。私はそんな屋久島で、サルと隣り合って暮らす人たちの生活に興味を持ち、調査をおこなってきました。その成果として出版されたのが、今回紹介する論文です。

屋久島の集落には、ポンカンやタンカンといった柑橘類の果樹園が多く見られ、屋久島の農業の中心となっています。しかし、1970-80 年代ごろから、サルによる農作物被害が深刻な問題となってきました。被害の顕在化から 40-50 年ほどが経った現在は、電気柵などの対策の甲斐があって、被害金額が減少してきています。一方で、集落を歩いていると、



タンカンの収穫期に撮影した果樹園

いまだに「サルの被害に困っているので捕獲してほしい」というお話をたくさんききます。この論文では、被害金額という量的な指標ではなく、農家さんの被害認識の面から現在の屋久島の農作物被害問題を捉え、問題を軽減するために何ができるか検討しました。

調査は屋久島の集落の名前すらほとんど知らなかった 2020 年の秋にはじめ、まずは各集落の区長さんにお話を伺うことから始めました。集落ごとに被害状況も対策状況も、その背景となる地域の産業すら異なることが本当におもしろく、次は島中の果樹園をたずねてみることにしました。電気柵の状況を記録したり農家さんのお話をきいたりしながら、歩けば歩くほど屋久島の地図にどんどん色がついていくような感覚でした。その後は柑橘類栽培が盛んな南部の集落中心に、親しくなった農家さんにインタビューをさせてもらい、サルとの関わりの変化や被害対策の苦労など、様々なことを教えてもらいました。時には農作業にも参加させてもらいながら、サルのことにとどまらない屋久島での暮らしの話をたくさんきかせてもらった今日に至るまでの時間は、私の宝物です。



サルの被害から果樹を守るための電気柵

そうした調査の中で、被害が「大きい」と認識されている集落は、販売用に多くの果樹を育てている集落ではなく、小規模の自家用栽培中心におこなっている集落であることがわかってきました。こうした集落では、柑橘類栽培に対する経済的な重要性が低く、例えば孫にポンカンを送る楽しみといったような社会的・精神的な動機付けのもとで栽培されていることが多いため、被害認識が許容と拒絶の双方を含んだ複雑な構造を持ちやすい傾向にあります。つまり、普段は「被害にあっても家計には関わらないから大したことない」という許容的な被害認識のもと、しんどい思いをしてまで電気柵の管理をしない / できない一方で、その結果として電気柵が荒廃し、いざ孫に送る予定だった果実がサルに食べ尽くされると、一気に被害認識が悪化するといったような状況が頻繁にみられます。少量しか作っていないと一度の被害で食べられてしまう割合も大きく、なおさら農

サルのメモ帖

もともと、アフリカでゾウの研究がしたくて京都大学の大学院に入った大坂さんが、コロナのために海外に行けないでいるところを、せっかくだから屋久島で研究をやりなよと、半谷がお誘いしたのでした。

家さんの憤りは高まりやすくなります。こうした被害認識の複雑さと可変性が、自家用栽培が多い集落の被害を「大きく」していると考えられます。また、農家さんが「被害にあうのは仕方ない」と寛容な被害認識を語っていても、区長さんから私に伝えられる際には被害が「大きい」ことが強調された例もありました。こうして地域内で被害が共有されたり地域の代表者に被害が代弁されたりしているうちに否定的な被害が強調されていく現象は、他の地域にも確認されています。このように、自家用栽培の地域中心に否定的な被害認識が顕在化したり先鋭化されたりすることによって、島全体としては被害量が減少したにも関わらず、「被害がひどいからサルを撃ってくれ」という要求はおさまらない状況が生じています。また、屋久島町の鳥獣被害防止計画では、被害状況やニホンザルの生息状況を十分に踏まえた捕獲数や捕獲場所の設定がなされておらず、被害も軽減してかつニホンザルの保全も両立できるような効果的な捕獲システムが確立されていないとう課題もあります。こうした状況への対策として、本論文では、①過疎・高齢化による人手不足を解消する地域づくりをおこなうことで、電気柵管理のコストを下げること、②被害状況の共有や被害対策の共同実施など、被害認識の緩和につながる機会を作ること、③適切な捕獲体制を整えることの３つを提案しました。屋久島の人々とサルの双方が慣れ親しんだ自然の中で豊かな暮らしを続けていけるように、私自身もできることを探し続けていきたいと思います。



サルによる被害の様子



サルのメモ帖

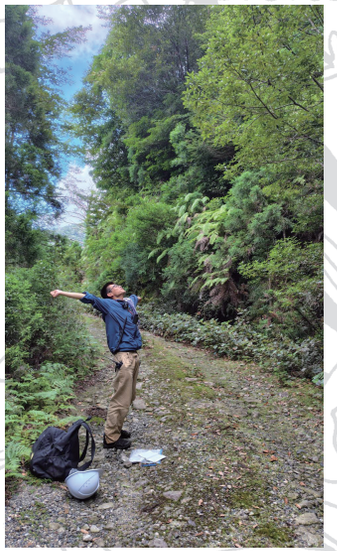
屋久島のサルの生態に関する研究は山ほどありますが、保全に関する研究はほんの少し、農作物被害の解決を目指したものはさらに少ないのが現状です。大坂さんの研究をきっかけに、屋久島でのサルの科学的管理が行われるようになることを願っています。

24時間戦えますか 6

バブル期の CM ソング「24 時間戦えますか」は、調査隊の替え歌の傑作「20 日間戦えますか」の元歌です。朝から晩まで、いろいろ詰まった調査の一日を紹介します。



シカ調査



前回でお昼ご飯もおわり、次は定点調査の頃かなと予想をしていた読者のみなさん！今回は番外編、シカ調査の一日についてです。我々ヤクザル調査隊がサルの調査だけをしているわけでないことをお示ししましょう！

シカ調査の目的は、シカの密度を推定することであり、そのために糞の数を調査します。定点の近くにあるシカ調査用の調査区に行き、そこにある糞の数を数えるのです。30 の調査区を 1 か月の期間中に調査をします。

この調査は、「通常のサル調査と同時に一人ないし二人が別行動で行う」または、「天候が怪しく、1 日サル調査ができなさそうなときにみんなで行う」の 2 パターンがあります。状況によりますが、だいたい 1 日で 2 ～ 3 地点をやりとげます。せっかくなのでみなさまにはヤクザル流のシカ調査法を詳しくお教えしましょう。目指せ！シカ調査マスター！

①まずは、調査区を探します。調査区は定点のそばにあり、10m おきに 6 本の杭が南北方向に並んでいます。この杭を見つけるのが第一歩です。

②続いて、シカフンの捜索を行います。10m ごとの杭の両側 2m の範囲をひたすら落ち葉をかき分けて探します。見つけた糞粒と糞塊の数を記録します (糞粒とは 1 つの糞。糞塊とは糞粒が 10 個以上からなる糞の塊)。

③②を 10m ごとに 5 回繰り返します。

④見つけた糞粒は採取して、ノギスを使って長径、短径を計測します。

以上がシカ調査の流れです。順調に、手際よく行えば、わりと短時間で行うことができます。

しかし、いくつかの挫折ポイントが存在するのです。

まずは①の段階。そう、杭がなかなか見つからないのです。定点のそばにありすぐ見つかるものから、完全に森の中に溶け込んでいるものまで、杭を探す難易度は様々。初めの 1 本がなかなか見つかりません。ようやく杭をみつけていざシカフンを探します。ちょうどいい長さの枝を見つけて落ち葉をかき分け、シカフン捜索です。見つかる糞の数は場所次第。1 つも糞がない調査区もあれば、たくさん糞が出てくる場所もあります。シカ糞がない調査区だと、だんだんつらくなっていきます。一向に見つからないシカ糞、舞う砂ぼこり、落ち葉をかき分けるためにかがめた腰は痛み苦痛を感じるようになってきました。何が楽しいんや ...。そんな心の声が口から洩れだしそうになった時、ついにシカの糞粒を発見！やっと見つけた糞は宝のようでした。



見つけた糞はテン場や好和荘へ持って帰り、ノギスでサイズを計測です。どうやらノギスが壊れていてうまく使えなさそうです。「だいたいでいいけん」。一緒に調査をしていた仲渡さんがそうおっしゃいます。こんなグダグダでいいのか !?

どうやらシカ調査に対する捉え方は人それぞれで、苦痛が多くてつらいという調査員や、楽しすぎてハマってしまうという調査員がいるようです。とある調査員はシカ調査が楽しすぎて、定点調査の際に自分で調査区を作り、セルフシカ調査を行っていました！残念ながら私は前者のようで実はあまりシカ調査は好きではありません。が、せっかくこの原稿を書く機会をいただいたので、今後は喜んでシカ調査をしたいと思います。読者の皆さんも機会があればセルフシカ調査をしてみてはいかがでしょうか？

（柴田尚輝、2023 - 2025 参加）

サルのメモ帖

なぜ糞の大きさまで測るのか、と思われたかもしれません。コドモとオトナでは、糞の大きさに違いがあり、その年の若齢個体の割合の指標を得ることができます。DNA で性別もわかるかも、と思ってサンプルを集めていた時期もあったのですが、そちらはむりそうです。

犬山より

ヤクザル調査隊は、いわば年に一度のお祭りなわけですが、そこから派生した、様々な研究が、調査とは別の時期に、ときには屋久島からも離れた場所で行われています。角田史也さん (2018 - 2025 年参加) は、ヤブツバキの花とニホンザルの関係についての研究をしていますが、冬に 4 か月以上にわたって屋久島で行う彼の調査には、ヤクザル調査の隊員 10 人余りが、入れ代わり立ち代わり来島して協力しています。冬の大川林道終点や西部林道で、ツバキの木にどんな動物が来るか、定点調査で調べたりします。ときに雪が積もっている中で行う定点調査は、夏とは違う過酷な調査でしょう。今年のヤクザル調査の後には、4 人の調査員がお隣の口永良部島に行き、エラブオオコウモリの調査を行いました。この通信の編集と同時に行われたまとめ作業の最中、データの入力やホームページの更新作業のあいまに、調査員が犬山市内の各所でハエの採取を行いました。これは、2015 年から 2017 年のヤクザル調査の最中にハエを集め、そこから DNA を抽出して、どのような脊椎動物がいるのかを調べた研究に端を発しています。その研究から、ハエはどの程度の距離を分散するのだろう、という疑問が生まれました。その問いに答えるべく、マーキングしたハエ約 1000 匹を、犬山キャンパスで一斉に放したあと、市内各所で採取して、ハエの分散距離を実際に調べようという計画です。ハエを誘引するための腐った魚を持って犬山市内に散る調査員たち、とてもかっこよかったです！ヤクザル調査隊で培われたマンパワーは、ほかの研究をするのにも、強力な武器になるというわけです。

屋久島いきもの調査隊通信「瀬切の森からの手紙」第 11 号
2025 年 9 月 28 日発行
発行者：特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊
住所：484-0003　犬山市善師野伏屋 7 − 1
ホームページ：https://yakushimaikimono.com/
メールアドレス：yakuzaru.researchgroup@gmail.com
編集：噯口ひより、半谷吾郎